

阿部昭

対談集

短篇小説を語る

阿部昭
対談集

短篇小説を語る

福武書店



© Akira Abe.

Printed in Japan,

1987

阿部昭（あべ・あきら）
一九三四年、広島市に生ま
れる。五九年、東京大学文
学部仏文科卒業。七一年ま
でTBS勤務。六二年「子
供部屋」で文壇にデビュー。
著書として『司令の休暇』
『阿部昭18の短篇』『短編小
説礼讃』『阿部昭全作品』（全
8巻）など多数。

短篇小説を語る

昭和六十二年十一月十日第二印刷
昭和六十二年十一月十六日第一刷発行

著者 阿部 昭

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社福武書店

東京都千代田区九段南二二三二八

郵便番号 一〇二一

電話 東京（〇三）二三〇一一三三

振替 東京六一〇五〇九七

印刷 大日本印刷株式会社

平版 株式会社栗田印刷

製本 加藤製本株式会社

定価 八八〇円

乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-8288-2243-7 C0095 ND C914 191 198p

目次

短編小説の愉しみ

辻邦生 阿部昭

5

インタビュール 1

33

短篇小説と現代

佐伯彰一 阿部昭

43

インタビュール 2

133

短篇小説を語る

荒川洋治 阿部昭

145

付

『短編小説礼讃』書評

荒川洋治

181

短編コレクション・ベスト 33

荒川洋治

185

あとがき

191

装
丁
小
山
晃
一

短篇小説を語る

阿部昭対談集

短編小説の愉しみ

辻 邦生
阿部 昭

辻 今日の対談のテーマは短編小説ということですが、僕は阿部さんの作品の中で『単純な生活』、あれに感心しましたね。

阿部 長いんですよ、あれ。

辻 長いけれども、一回一回がじつによく短編的にまとまっている。僕は自分の人生の中でああいう生活を持続できたら、どんなに生きることがいろいろな面で豊かに見えてくるかなと、かねがね感じていたんですね。僕にはとても書けないなあと……。

阿部 そういわれるけれども、辻さんも短編は書かれている。あんまりたくさん長編を書かれたので忘れちゃったんじゃないですか（笑）。

辻 いえいえ、そんなことはない。やはり僕なんかは、人生の中にどっぷりとひたっているいろいろなものを楽しんでいく、その時間の経過をゆっくり味わうというよりも、ある目的に向かって秩序立てて、構造化していかなければならないという、妙な使命感みたいなものがある。明治以来の追いつけ追いこせで、しかも戦争に負けて、すべて問題化したよう

な時代におかれていたものですから、目に触れたり、耳に聞いたり、はだに触ったりする、そういう喜びを飛び越して、一挙に本質とか、論理の筋書を追ってとかいうようなことでずっときましたから……。

阿部　それが長編作家というもんなんでしょう(笑)。

辻　僕は阿部さんに一種憧れのような気持ちを感じるのは、そういうものが自分の中に全くないからです。植物の名前一つ、花の名前一つ、虫の名前一つ、ほんとに愛している人がいるでしょう。そういう人を見ると、とても強く打たれるわけです。

こんど阿部さんが書かれた岩波新書の『短編小説礼讃』で取り上げている国木田独歩の『忘れえぬ人々』、あそこに出てくる東京へ出て志を遂げようとする二人の青年が感じている気持ちと、ちょっと似ていると思うのです。あの青年二人は明治国家によってつくられた人で、インテリゲンチヤですね。自然に与えられた時間の中でゆっくり生というものを満たしていく人じゃなくて、論理化された、必要なものだけを組み立てていく人です。にもかかわらず、そうした生き方の中にもすごく欠落しているものを、少なくとも語り手の青年は感じるわけですね。だから、ほんとに生の自然の中に与えられた宿命をたっぷりと生きている、名もない、平凡な人たちが「忘れえぬ人々」になる……。

阿部 純然たる明治の精神が生きているんですね、辻さんには（笑）。

辻 僕は、最初にフランスへ行ってから何年かしてまた行ったときに、ある新聞社の特派員が、最初のころの話聞いて、まじまじと僕の顔を見て、「ほんとに辻さんたちは永井荷風のころの人と同じですね」というんですね。つまり船に乗って洋行して、日本国家の使命を果たさなければならぬという使命感があったのですね。

阿部 日本の作家が、大正になってみんな短編の腕を上げるでしょう。あれはその前にそういう明治があったからともいえますね。

辻 そうなんです。大正になって日本の短編小説の世界に一つの型が生れたのは、じつくりと生活の中に根を置いた生き方が肯定されるようになったからじゃないかと思えますね。

だから阿部さんのこんどの本を読みながら、僕はなぜ阿部昭に惹かれるのか、理由がわかったわけですよ。「忘れえぬ人」だ（笑）。

阿部 でも辻さん、最初に習作なんか書かれたときはもちろん短編でしょう？

辻 そうですね。志賀直哉の『剃刀』とか『網走まで』とか、ただ読んでいただけじゃ、そこに表現されたものを身体でとらえられないものだから、小説を原稿用紙に写したんで

す。原稿用紙に書かれた字が、活字になるとこういう効果があるんだなというようなことを考えながら……。

そのころ、写生文が大事だろうと思って、一生懸命写生ということをした。よく見て書くということですね。僕は子供のときからものを書くのがすごく好きだったんです。絵をぬりたくったり、歌を歌ったりするのが好きな子がいるように、字を書いて文章をつくることがほんとに好きだった。

阿部 つくることが好きなのね。

辻 だから、作文なんか書かされるとウソを書くわけです。

阿部 はあ、たいしたもんですね（笑）。

辻 ほんのことが書けない。桜の花がいろいろな形に見えたと書くわけですが、もし先生が同じところを通して「おまえそんな桜はどこにあるんだ」といわれたらどうしようかと思った（笑）。

ところが、志賀直哉は写生の極だと思って写生文を書いていくのだけれど、直哉のようにはどうしても書けないんです。ああいう勢いが出てこないし、精密さ、明晰さ、それから余韻がどうしても出てこない。なぜこんなことになるのだろうかとすごく悩んだ時期があ

ります。

阿部 しかし、志賀直哉の目というのはものすごいすよね。

辻 感覚的にすごいすね。

阿部 小林秀雄だったと思うけれども、志賀直哉の目はいわゆる文士の目じゃなくて画家の目だというんですね。これは名評じゃないかと思う。だから、真似しないほうがいいということは後でわかるんですがね(笑)。

辻 そうそう。僕らの目はすごくインテリ化され、近代人化されていて、ああいう感性、生命の迫力はありませんものね。

阿部 画家の小出楯重が、随筆をたくさん書いています。彼が言うには、あまり文章書いていると視力が鈍るって、次に絵を描くときに。文と絵は敵対関係にあるんじゃないかな。

辻 当然そうだと思いますね。たとえばモネはアメリカ人の女の画家に、ここに木があるとか、花があるとか思っただけ描いてはいけない、ここに青や赤の斑点があると思っただけ描きなさいと言っているのです。

阿部 文章は見たものに端から名前つけていくわけでしょう、だから抽象的なのですよ

ね。

短編作家の資質

辻 阿部さんは「短編小説とは何かというようなことはまず省略したい」と書かれている。定義はなさらない。

阿部 いや、できないから(笑)。

辻 何かと決めてしまうと、すでにそこで本来生きているものが生命を失って、すごく狭いものになってしまう。それよりも阿部さんは「耳よりな話」とか「いい話」とかいうふうに出されているでしょう。

阿部 あれは僕は、いかに定義から逃げようかと苦心して考えたのです。どんな本を見ても必ず「自然主義」とか「私小説」とかいう言葉が出てくるのですが、僕は書くのにそういう言葉ちつとも要らなかったな。

辻 この本の一番すばらしいのはその点だと思う。つまりきちんとあるたしかな手ごたえをもって阿部さんは書いている。さすが作家だな、つくり手のすばらしさだなと思うのは、自分のよく使っている、よくなじんでいる、自分の道具になりきった言葉で書かれて

いることで、それがじつにいいなと思った。

阿部 たとえば「文体」なんていう言葉でも、使おうとするとなかなか使いきれないんで、やっぱり「文章」と書くほうを僕は好みます。どうしても「文体」なんていう言葉を出したくはなりませんけどね。しかし、文体って何ですかといわれると、これはまたむずかしいですよ。

それと、たとえば独歩にしても、普通の見方では、最初は詩的な傾向が強くて、ロマンチックで、晩年は非常にリアルな現実追求に目覚めたということになっていますが、作家というのは、最初から両面ともっているもので、そのときどきにどちらかが出るわけですね。図式的説明では、だんだんこの人はこう変貌していったなんて説明するけれども、それは書き手からいうとちょっと違うんですね。

辻 大いに違いますね。たとえばヘミングウェイみたいにいろいろ実生活上の材料を残している人の評伝などを見ても、なんかこの作家の肝心なところが書けてないなど、作品そのものを読んで感じますね。僕らがつくり手として作品の中から感じているものは、決して生涯をトータルしたって出てこない。

阿部 辻さん、若いとき、ヘミングウェイのスタイル、やっぱりちょっと魅力あったでし

よう？

辻　すぐ好きだったですね。翻訳では十分味わえないと僕なりに思って、英語も比較的シンプルだから、よく読みましたね。フランスへ行くときも船の中で読んでいたのはヘミングウェイだった。パリに行ったときも、二〇年代にヘミングウェイがパリにいたというのが、僕にとっては非常に大きな励みだったですね。

あの人で非常に驚くのは、ああいうシンプルな文体にもかかわらず、どうしてあんなに情感というか、感動を呼び起こせるのか。その仕掛けを知りたいというのが最初の動機にありましたね。僕はすぐく気に入った作家のそういう秘密の構造を解きほぐして考えるのが、若いときから好きだったのです。

阿部　科学的なんですね。

辻　僕のところは医者、血が流れているものだから。

阿部　辻さん、最初理科系でしょう？

辻　理乙です。

阿部　梶井基次郎も理科系なんです。梶井の詩にもちよつと理科系の頭を感じますね。

辻　ああ、そうですか。